

編集委員の皆さん、こんにちは。

最近、朝夕すっかり秋らしくなってきました。心地よい空気のせい、机に向かって本を広げるのもパソコンを開くのも、何となく気分がいいものです。

さて、9月24日の第1回講演会はいかがでしたか？古塚先生のお話を聞いて小祿のいいところを改めて発見できたでしょうか。今回は大まかなお話で、これからもっともっと深い内容になるそうです。私たち皆でつくる字誌のために大いに役立てましょう！

講演会の内容をまとめました。今回、参加できなかった皆さんもぜひ読んでみてくださいね。

－ 平成 22 年度第 1 回講演会 「小祿再発見！」 －



ねえ……)

★ 字誌づくり

今から 20 年くらい前に字誌ブームが起こりました。山原から火がついたわけですが最初は名護市の市史編纂室が各字に字誌を作ってもらい、それを市史にまとめるということがきっかけでした。

那覇市はどうかというと、一番盛んに字誌づくりが行われているのはこの小祿地域で、古いものでは大嶺や鏡水などがあります。

意外に少ないのが那覇・首里地域。首里地域では「首里」としてのまとまりで、各「ムラ」という意識があまりありません。

那覇では久米村がその歴史をまとめていますが、久米村はもともと中国の方々が渡来してできた地域なので、他とちょっと違います。また、真和志地域では国場や上間、識名などがあります。

さて、字誌づくりは「皆で作る」という作業です。それは皆で役割を分担し、皆で編集をしながら方向性を見いだす。そのことがとても大事なことです。

★ 「ウルク」ということば

「烏魯古結制(ウルクウッチ)」

15-16 世紀、琉球が活発に海外貿易をしていた頃「歴代宝案」という古い文献に「ウルクウッチ」という人が登場します。

「歴代宝案」は久米村に伝えられてきた文献で、当時、諸外国とやりとりをした手紙、文書を記録した案文集です。



★ 古い小禄地域

垣花の先、ミーヌシンバルという所に遺跡があります。沖縄では最も古いと言われている爪型紋土器がたくさん出ました。

これまでは主に東海岸、うるま市あたりで出ていましたが、その量はほんのわずかで一つの

遺跡から片手分ぐらいです。ところが、この遺跡からはバケツで量れるほどたくさん。西海岸からこれほど出てくるのは初めてのことでした。

また、山下洞穴の山下洞人は約 3 万 2 千年前の古代人。日本で発見された最も古い人骨です。



★ 小禄の地形を考える

地球の気候は寒暖を繰り返します。すると、北極や南極の氷の厚さが変わり、その影響で海面が低くなったり高くなったりします。

山下洞人がいた頃は寒い時期で海面が低く、歩いて慶良間まで行けるほどでした。那覇の平均気温が今の東京と同じ 22-23℃ くらい。東シナ海は大きな内海で、ニカ所だけが太平洋とつながっていました。一つは宮古島と本島の間。もう一つは奄美とトカラ列島の間。ただ、動物が渡っていける程度の隙間で、いろいろな動物や人が往来しました。

小禄を考えると、慶良間まで歩いていけたということは、かなり高台の地域であったということがいえます。

海面が高くなったり低くなったりすると、人間も高いところや低いところ、または中間ぐらいのところに移り住むことを繰り返してきました。

この辺りで一番高いところは小禄の御嶽です。ですから、大昔から人々が住む場所としては非常に良い場所でした。

もう一つ、人が住むための条件として水が必要です。小禄の金満御嶽を考えると、周辺にはいくつもの井戸があり、大変、水の便がいい場所です。この井戸の場所を地図に落してみると、御嶽の森を中心にして水の出るところに人が住んでいたということがわかります。

小禄も理にかなって、人が住むのに都合のいいところといえます。



★ 小禄の地形と二つの御嶽

那覇はもともと浮島といわれていました。国場川の河口、漫湖は大きな海でした。

例えば、与儀。現在の市民会館横の知事公舎、あの辺りまで海でした。与儀市場の中にある小さな公園の名前は「ふなばしばる公園」、そこまで船が来たので「ふなばしばる」という原名がついたといわれます。

また、知事公舎のある場所は「みゃぎばる」にある「みゃぎ御嶽」です。与儀の御嶽でもともと島でした。部落から少し離れたところの島が御嶽になっていました。

「みゃぎ」というのは、後に「宮城」と当て字する場合と、「見上げ」と当て字する場合があります。首里の「みゃぎむい」というのは「見上げる」方で、後に第二尚氏初代尚円王が一度葬られた場所があります。

だいたい「みゃぎむい」というのは海のそば、海が近いところです。今は陸になっているけれども、当時はすぐそばまで海。森が海まで入っているようなところでした。

今の松川辺りも船が入ってくるほどの川幅でした。安里川も今よりももっとも広く、その湾にポツンと浮いているのが那覇、浮島でした。

では、その頃の小禄はというと、かなり入江になっていて中の方まで水が入っていたということが推測できます。そのことと、今この場所、真玉御嶽があるということは、小禄の地形を知る上で重要なポイントになります。

小禄には金満御嶽(小禄の御嶽)と真玉御嶽の二つの御嶽がありますが、一つの部落に二つ御嶽があるというのは原則としてあり得ません。二つある場合には、二つの部落がくっついたというのが原則です。

例えば、大宜味村謝名城という部落がありますが、そこは三つの部落がくっついてできた部落で御嶽も三つあります。

御嶽というのは政府公認であって、18世紀琉球王府が調査しています。その記録の中に小禄は「小禄の御嶽」と「真玉御嶽」の二つが出てきます。これは特殊な例で、他には数か所しかありません。

地形からみると、金満御嶽が小禄の御嶽。真玉御嶽は「島」であったと考えられます。島だからニライカナイの神様として祀り、金満御嶽はご先祖様として崇めた。こういう例が特殊です。

★ 小禄の地形と井田（ゐーだ）

地形で考えると、特異なものとして井田があります。どーむらでこれを作っていたということは重要なポイントです。

井はムシロに使うには高級な素材なので、主に畳表として使います。畳は一般の家庭にはほとんどなく、それを消費するところが必要です。それが那覇の士族や辻などの遊郭でした。

畳を切ったあとの切れ端は運搬具としても重宝しました。シシまちに行くと、買った肉の塊を井で結わえて小指に引っかけて帰ってくる(仕草)。

また「琉球」という言葉は畳用語になっていて、縁のない畳を「琉球」といいます。柔道の加納治五郎が琉球の井を気にいって、非常に丈夫だからと講道館の公用の畳に用いたのが最初という伝説があります。どうして琉球の井を気にいったか？ それは普通のイグサが丸い断片なのに比べて琉球の井は三角で丈夫だからです。

琉球の井とピーグは違うものです。その井田があるということは、地形との関わり、さらに消費地である那覇という都市部を控えていたということが重要になります。

★ 小禄の織物「小禄紺地」

紺地の生産は、まず近くに一大消費地があったということが関係します。紺地はお祝い用の晴れ着。那覇の士族がおしゃれ着として買いました。中でも一番消費してくれるのは辻です。重要な現金収入でした。

綿の導入は、垣花の儀間真常が薩摩から持ってきた綿の種を栽培したところから始まります。同時に、機織りをする女性を連れてきて染め織を作ったといわれています。

では、小禄は綿花を作っていたのか。染めや図案の設計は専門的な技術であるが、それは

どうしていたのか。織りあげる柄も、それを着る人の身分や状況によって異なっていたはずで、小禄どーむらではどんな柄を織っていたのか。その柄の名前は何と言っていたのか。こういった広がりが出てきます。

また、織物をしてもらってそれを自分たちが着るわけではありません。では自分たちは何を着ていたのか。季節による違いは？「フクター」を着るというが、そのボロはどこから仕入れていたのか。織物を生産していた場所だからこそ興味深いものがあります。

★ 小禄の豚 ワーサー

小禄の豚はすごい！ハワイでもすごい！といわれました。一番うまくて大きくて、しかも早く育てられる。小禄のワーサーはそういう技術を持っていると評価された、それはなぜか？

これもやはり那覇との関係があります。冊封使が来て那覇に滞在すると、彼らもまた豚肉中心の料理を食するので、それに堪えるものを出さなければいけません。そのために盛んに生産されました。もちろん、那覇でも士族の家にワーフルがあって豚を養ってはいますが、それは自分たちが食べるためのものであって、売るので

はありません。小禄は売るために生産していたということが重要です。

ある時、餓死で豚が供給できないことがあり、冊封使を迎えた王府が非常に困ったことがありました。全琉から豚をかき集めて何とか対応しましたが、その時に、小禄の豚がまいってしまつてこんなことになってしまうのかと、それほどの影響を与えました。

このような時に誰が一番困るかということ都市部です。小禄にはそういう地域の特性がありました。



★ 小禄の農作物 蔬菜類（そさい）

他の地域では米や麦、さとうきびを作り、その傍らで自分たちが食べる程度の蔬菜類を作っていました。小禄地域ではバラエティーにとんだものを出荷するために作っていました。

いつ頃、こういった野菜類が入ってきたのかということも考えながら整理すると、小禄の特徴、どーむらの古い特徴が見えてきます。

例えば、赤い人参はいつ頃？チデアクニーとどう違うの？タマナーは誰が作ったのか？どれくらい作ったか？といったことを考えていくと地域の蔬菜類の特徴が出てきます。



また、本来は米で租税を納めるものですが、それに加えて畑で大豆などを育てる力があつたわけ。そして、それが必要とされました。

農作物ということで、大嶺のソテツがあります。大嶺では昭和の初めに輸出品として栽培していました。どこに輸出していたかという、ヨーロッパです。ソテツの葉っぱをクリスマス用の飾りとして輸出していました。

このように、その地域、地域で作られていた農作物というのはいろいろなところに関連していくものです。



★ 小禄と海外との関係

金満御嶽からは青磁が拾えます。青磁は中国からの輸入磁器で、沖縄では焼くことができないものです。そういうものが出てくるのはなぜか？

そこには力のある豪族がいたという伝承があります。小禄の御嶽であると同時に山城として小禄城(ぐすく)と呼ぶ人もいます。そういう痕跡が見られるということは、海外との交易と関わりが深いと考えられます。

実際に大嶺の人は船を曳く作業に従事した人が多くいました。小禄の場合は、曳き手としてというよりも乗組員、「水主(カコ)」として一緒に

海外に行っている家があります。乗組員として行く時には何かしら物を持っていく。代わりに中国の皇帝からはご褒美として、琉球から持っていったものを高値で買い上げてもらったり、鎌や鍬など鉄製の農具や青磁の器をもらったりしたということを知っています。

15-16 世紀の海外貿易を著した案文集に「ウルク」という言葉が出てくることからしても、小禄の人が海外に行っていたことを示し、後々も乗組員として重要な役割を果たしてきたといえます。



★ 最後に…

いくつか紹介しました。こういったところが小禄の特徴、すごいところ、他の部落にはない小禄の自慢できるところだといえます。

字誌を考えるときに、小禄が真ん中の世界地図を考えてみてください。小禄を中心にした考え方で小禄の特徴を手繰ってみると、世界の中で、日本の中で、沖縄の中での小禄の姿が見えてきます。それが小禄のいいところを見つけていく一番の近道だと思います。



<編集後記>

いかがでしたか。

真玉御嶽がもしかしたら「島」だったかもしれないなんて…。当時に思いを馳せると何だかワクワクしてきます。その周辺はどういう状況だったのでしょうか？

小禄の地形と地理的位置が、多方面にわたって琉球王府や那覇のまちの重要な役割を担っていたんですね。

さて、次回は10月29日(金)を予定しています。

テーマは「沖縄の信仰」。楽しみですね♪

また改めてお知らせします。ぜひご参加を！

(事務局 上原仙子)